

環境や内的要因によるもの

加齢による薄毛や脱毛の他にも、環境や蓄積された身体の状態により引き起こされるものもあります。特に抜毛症は小学4年生ごろがボリュームゾーン。心と身体の変化、勉強での悩み、進路や受験、他者との比較で悩む時期に心のもやもやを言語化できず、髪の毛など体毛を抜くという「行動」として表面化する事もあります。

※抜毛症について詳しく知りたい方はこちら ▶



<https://tricho.jp/wp/wp-content/uploads/534b008cb5375e3bda5d8f21c0cd8d79.pdf>

抜毛症

自身で頭髮、または体毛などを繰り返し抜き、その結果、様々な程度の脱毛状態に至る慢性疾患です。2つの型があり、衝動や体の感覚、あるいは思考を制御するために意図的に行われる自覚のある抜毛と、座って何かをしている時などに行われる無意識の型があります。最初は、前者の意図的に行われる抜毛から発症して、時間の経過とともに、無意識に行われる後者へ移行するケースが多いです。

前思春期から思春期にかけて多発します。その要因には様々なものがあると考えられており、4分の1以上はストレス状況と関連しているといわれています。

非常に慢性化している例では、意思に反して同じことを繰り返してしまう脳の病「強迫性障害」の併存していることもあるため、心身医学的観点などの多面的なアプローチが必要となることも。治療法は様々です。



薬剤やウィルス疾患・外的要因(事故)による影響

抗がん剤の治療の副作用での脱毛は、治療前に医師に説明を受けますが、ウィッグ選びなどは自分たちで行う必要があります。治療が終わった後も、縮毛やくせ毛になったり、生えそろわないなど、元の髪質になるまでに時間がかかることがあります。肌質が敏感になっても使用が出来る素材で作られたケア帽子やスカーフを利用する方もいます。抗がん剤の副作用以外にも、ウィルス性疾患後遺症などで脱毛されるケース、交通事故などの外的要因により髪の毛が生えないなど、原因はいたるところに考えられます。

